



橘の娘



ふね友み

ラクシュミー シャーヤーン サマルカンド タージク
 洛澄の父 舎夜は 康国の豪商に生まれ、五つの時アラブ軍 大食の脅威を恐れ一族で唐の
 敦煌どんこうに移り住んだ。

言うまでも無く、敬虔なアフラ・マズダの信徒たる ゾロアスターゾロアスター教徒きょう 徒の家である。

しかし物心ついてからを敦煌の、ぶつきょう 佛教 色濃く異種俗交じり合う風潮の中過ごした舎夜は、青年となる頃にはすっかり佛教被れとなり、嫁を取らせて抑えようという親族の策も空しく、十六の時遂には出奔してしまった。向かった先は天竺インドである。

シャーヤーンとは富を意味する商家らしい名だが、あいにくと本人は学究の徒となることに憧れ、この世の富には執着を見せなかった。

そうは言っても、世間知らずの坊が一人生き延びられたのは、家からちゃっかりと（餞別だとうそぶいて）持ち出した金銀細工と、幼い頃から叩き込まれた好機を逃さぬ商魂、そして裕福な家シャーヤーンで培われた天真爛漫さのおかげである。肝心なところで抜け目無いあたり、正に「富の子」と言えなくもない。

南道を通り西へ向かい、あやふやにしか覚えていなかった一族の故郷サマルカンドに立ち寄った後、引き返して南へ向かった。修行と意気込みヒマラヤ越えもしたようだ。

天竺に入り、各地を観光がてら巡礼した後、かの高名なナーランダー大学を訪ねたが、ほぼ門前払いをくらい初めての挫折を味わう。しかし半年ほど梵語などを猛勉強しただけで末席に連なることを許されたというから、それなりにおつむは良かったのだろう。

もともと、ここも一年で去ることになる。本人曰く、「頭でっかちの学問に得心できなかった」ということだが、ようは飽きたのだろうと洛澄は見ている。

舎夜が敦煌の実家に帰った時、既に五年が過ぎていて、親族は放ったらかしにされた嫁を寡婦とするかどうかを話し合い始めていた。

舎夜の帰還に、嫁茉莉花サマンが喜んだのか落胆したのかは、ひとまず置いておく。

実家に戻ったものの、一月もせぬ間に舎夜は再び家を出る。ただし、今度は妻とその叔母みやこを連れていた。今度は東に向かった。めざすは華の京 長安である。

商隊に紛れつつ着いた先、長安では天竺を知る学者というふうに迎えられて、寺や豪商の世話になりながら、中々忙しい日々を過ごした。長男が産まれたのもこの頃だ。

しかしこの長男は、流行りの風邪にやられ、立つことすら覚える前に逝ってしまった。時をたがえずして茉莉花の叔母サマンも亡くなる。

そんな失意の折、シャーヤーン 舎夜は 大和やまとからの留学僧と親しくなった。お互い異国に身を置くものとしての親近感もあったが、何より彼の語る、伸び行く新しい国の像に惹かれた。

長安は刺激に満ち、飽きることがないように思われたが、実のところ、舎夜には爛熟の唐の京は少々物足りなかった。同郷の者も多く、西域ふうの文化が流行を席卷していたので、どこか母の膝元でまどろんでいるような歯痒さを、まだ若い気概に富む舎夜は感じていたのだ。

留学僧に大和に来ないかと誘われた時、だから舎夜はあまり迷わなかった。妻茉莉花も、死の記憶の濃い長安に留まりたくなかったようだ。

そうして二人が大和に来てから、はや十七年。大和で生まれた ^{ラクシュミー} 洛澄 も数えて十五になった。洛澄の名は、父の好みでつけられた。つまり、大和の漢字の読みは、大和言葉で読む大和読みと、唐音で読む ^{から} 唐読みとがある。それを変幻自在に組み合わせて書きなす大和式の書き言葉を、舎夜はたいへん気に入っていた。洛澄の洛は唐読み、澄は大和読みである。吉祥天の天竺呼びであるラクシュミーに、大和式の漢字をあてたのだ。

もともと、母はこれにばかりはよい顔をしなかった。ふるさとの名残りのかけらも無い名を、受け入れるはずも無かったのかもしれない。

そういうわけで、母は洛澄をアフシャーンと呼ぶ。小雨、という意味である。洛澄には、だから名前が二つある。しかしアフシャーンと呼ぶのは、母だけの特権となっている。

そんなアフシャーンこと洛澄に、このたび縁談が持ち上がった。

かねてから懇意にしてきた ^{サマルカンド} 康国 系の庭師が、弟子の大和人を洛澄の夫にどうかと言ってきた。舎夜はなかなか喜んだが、茉莉花はよい顔をしなかった。娘には、同じ言葉を話す、ふるさとの近い者と一緒になってほしいと言った。もともとこれはほぼ口実と言ってよく、実際の理由はもっと複雑だと洛澄は思っているが、詳しいことはひとまず置く。

どういうわけだか、舎夜はここ数年、めっきり妻に弱くなっていた。若い時分の身勝手を今更に反省しているのか、単に愛情が深くなったのか。何にしろ、茉莉花の不服にすっかり勢いを削がれてしまった夫は、縁談をそれ以上進めも退けもしなかった。

洛澄は、これに大変な危機感を抱いた。

縁談に不満はない。むしろ、これ以上ない、いや二度とはない良縁だと思っている。

父が佛教徒である洛澄は、^{ゾロアスターキョウ} 祆教 ^{えびすひと} 徒である西域出の 胡人 たちに嫁ぐことは難しかったし、父に連れられて宮中に赴くこともあったので、異相の自分と大和人との婚姻はまずなさそうだと察していた。残るは唐人や韓人たちだが、彼らも身内の結束を重んじること甚だしいうえ、そもそも舎夜の知り合いは僧侶が多いので妻子のない者ばかりだ。

その点、名のある家に生まれながら異相の庭師に弟子入りしたという変り種は理想的とも言えた。胡人の園遊会で何度か見かけたが、洛澄とそれほど歳も変わらないように見えた。

破天荒な父と保守的な母に育てられた洛澄は、周りを客観的かつ冷静に見る目を、知らず養っていた。舎夜も茉莉花も、ともすれば正反対のことを洛澄に教えたので、洛澄はたえず己で判断しなければならなかった。そして、必要な時には自ら動かなければならないことも学んでいた（両親の性格の不一致は、しばしばはた迷惑な物事の停滞を招いたので）。

父母はやがて老いて、洛澄よりも先に世を去ってしまうだろう。その時に、一人になって洛澄を支えてくれるものは、夫と子がなくば、何も無いに違いない。せめて祆教徒であるか、大和人であるかすれば、どうにか生きる術を見つける望みもあつたろうが、あいにく洛澄はどちらでもないのだった。もしも両親がいなくなってしまうえば、洛澄は属するところのない根無し草でしかなかった。

そういうわけで、この大和人と一緒にになれるかどうかは、洛澄には死活問題である。

どうにかして、母を説き伏せて成婚させねばなるまいと画策した。

庭師のカームランを待ちながら、洛澄は橘の根元に座り、あおあおと茂る枝葉を見上げた。木にしては背丈が低いが、それでも洛澄が見上げるには充分で、冬になれば太陽の雫のような実をつける。それまでに、己の運命がよい方向に定められているといいと、洛澄は考えた。橘の実が、実る頃には。

花期を終えたチューリップや^{ラーレ}薔薇^{ヴァレダ}、菜の花が無造作に揺れている。庭にはささやかながらもせせらぎがあり、鳥のさえずりも心地よい。日差しの強い日にこのように木陰で休んでいると、小川からの涼風にまどろんでしまいそうになる。

この庭は、カームランがまだ若い時分、一人前の仕事をようやくもらえるようになった頃に造った庭だという。父と仲良くなったのもそれが縁だという話で、異教徒の新参者など初めは歯牙にもかけていなかったのに、かなり自由に仕事をさせてもらった上、大和生まれのカームランにはいまいち実感の湧かない海向こうの話の色々と聞くことができた。今ではすっかり、父^{シャーヤーン}舎夜^{シャヤーン}の無二の親友であり、洛澄にとっても第二の父と言える存在だ。

カームランが来た。洛澄は^{かづき}被衣を纏い、立ち上がり礼をとる。

「おじさま。ごきげんよう」

「ごきげんよう。用意はできているようだね」

「はい」

カームランが母に挨拶をして終わるのを待って、家を出た。

今日は、カームランの弟子である洛澄の見合い相手と引き合わせてもらう日だ。

女から男に会いに行くというのはあまり褒められたことでないように思われたが、家では母の目があるし、かといって人目のある園遊会でというのも好ましくない。四の五の言っていられない洛澄は、だからカームランにお願いをした。

^{ふじ}藤というその弟子は、からだを休めるべき午後にも何やら日銭を得るために仕事をしているようで、時間の空いている日はそう多くなかった。

「かわいいラクシュミーのために時間をつくってくれたのだよ」

カームランが言うので洛澄は気をよくしたが、師の言うことに逆らえなかつただけでは、と不安でもあった。何しろ洛澄と違い、向こうにはいくらでも、相手になってくれる大和人の娘たちがいるかもしれないのだ。

とはいえ、相手がどう思っていようとも、ただひたすら、懇願するしかない。

カームランの^{やしき}邸、庭に面した茶の間に、藤は落ち着いた佇まいで座っていた。風が吹いても全く動じなさそうに見えたが、洛澄たちが歩いてくるのに気づくと、向き直りふかぶかと頭を下げた。

そのような礼に慣れていない洛澄が、どのように返すべきなのか戸惑っていると、カームランが藤の面を上げさせた。

「よい、よい。フジ、こちらがかねてより話してあった、シャーヤーンのリクシュミー姫だ」

カームラーンがふいに大和言葉を使ったので、洛澄は思わず動揺した。カームラーンの大和言葉を聞くのは初めてであり、また洛澄自身、気軽に外に出ることが許されなくなったここ二年ほどは全く大和言葉を使っていなかったため、自分でも思いがけないほど耳慣れず、うろたえた。

しかしなんとか、礼はとる。

「^{こう}康洛澄です。お初にお目にかかります」

まずは大和言葉をつかえずに口にできたことに、ほっとする。

「藤とお呼びください。お話はかねがね。お目通り叶いまして、うれしうございます」

初めて聞く声は、ひ弱な見た目から想像していたよりもずっと低かった。社交辞令とは知っても、嬉しい言葉だ。

茶の間に上がり、それとなく観察してみると、藤というのは遠目に見るよりよほど精悍な顔つきをしていた。体格のよい胡人たちに囲まれていると頼りなくも見えたが、こうして差し向かいでまみえてみると、案外どっしりとした重みのようなものが感じられる。いささか乱暴に結われた黒髪は、少し淡い色合いをしていた。

「さて。こういう場はふつう女が仕切るからなあ、いまいち、勝手に掴めぬが。まあ、フジ。先だって言ったとおり、おぬしと直に言葉を交わすことは、こちらの姫のたつての願いだ。存分に話すがいい」

カームラーンのあまりに開けっぴろげな物言いに、いささかの居心地の悪さを感じながらも、自らの押しつけがましさを思い出した洛澄は慌てて言った。

「本日は、わたくしのためにわざわざお時間をいただき、ありがとうございました」

「いいえ。礼には及びませぬ」

そっけなく答える。

「藤さまは、ふだん、午後もお仕事をなさっていると聞きました」

「仕事と、言うほどのものではございませぬ。経文を写すだけの、文字さえ書ければ誰にでもできることです。どうせ時間があるのならば、実になることをしたいと思ひまして」

そこでカームラーンが口を挟んだ。

「こやつ、生意気にも面倒代だとか言って、それで得た食べ物などをわたしに納めよるのだよ。師が弟子の寝食を面倒見るのは、当たり前だと言うのに、聞かなくてな」

「しかしながら、終日働いているも同然の師匠をしり目に、のうのうとしているわけにはございませぬ」

「このように、頑固なのだ」

嘆息した。

どうやら藤の淡々とした物言いは、別に洛澄に対してだけではなく、常のもののようなのだ。冷たくあしらわれているわけではないようだと分かり、安堵する。

同時に、カームラーンがそこまで働いているという認識が洛澄にはなかったため、意外に思った。しかし、それを訊いてしまうと、きっとえんえんと本題から逸れてしまうので、またの機会にしようと思う。とはいえ、一方でどのように話を切り出せばよいのかもわからないので、話

を弾ませるために、今の疑問は口にするべきなのかもしれなかった。

旧知の間柄の者とばかり話してきた洛澄には、こういう時にどうするべきなのか、すばやい判断がちっともできず、実のところかなり緊張していたし、気が急ぐばかりである。

藤の方もことさら喋りのうまい方ではないようで、何も言ってくれない。

しばしの沈黙が続いて、見かねたようにカームラーンが口を出した。

「ラクシュミー。今日は特別に話したいことがあったのだろう」

「はい。大事なお願いがあって、本日は参りました」

ほっとする。心中でカームラーンに大喝采を送ったが、そのお願いのことを考えると、気を引き締めずにはいられない。

「藤さまは、わたくしと藤さまの間に持ち上がった縁談について、お聞き及びと存じます」

「……我が事でございますゆえ」

「では、わたくしの母が異を唱えたので、破談も同然となったことも、お聞き及びですか」

「存じております」

この間、藤は全くと言ってよいほど表情を動かさなかった。

「わたくしは、藤さまに、破談になったとは思わないでいただきたいのです」

初めて藤が表情らしきものを見せた。どこか床を彷徨っていた視線が、初めて洛澄に向けられたように思う。

「必ず、母を説得する心づもりです。ですからどうか、わたくしを藤さまの妻にしてくださいませ」

うるさい鼓動を抑えながら言ったので、声は浮ついて、震えていただろう。

藤の顔が、眼に見えて戸惑った。

目がぴたりと合って、すぐに逸らされる。

それで心許なくなっってこっそりカームラーンを見ると、驚いてはいるのかもしれないが、咎めるような雰囲気はかけらもなく、どう見ても面白がっていた。

「……殿上人の、^{うえびと}政^{まつりごと}本位の婚姻ではあるまいし、会ってその日に決めることではないでしょう」
ようやく藤が口を開く。

「藤さま。本来ならば、まず母を領かせて、父から改めてお話を通すが筋とは存じております。けれども、もしその間に藤さまが誰か他の方を妻にお迎えなさってしまえば、もうわたくしには他に娶っていただける方など無いのです。お妾ならありうるかもしれませぬが、それではいつ追い出されてしまうかわからないでしょう？」

この言には、藤は眉をひそめた。

「我が母は、世に言う、妾、でございましたが」

洛澄の頭から、さっと血の気が引いた。大失言だ。

冷や汗と共に、早鐘の心臓も戻ってくる。

「失礼いたしました。お詫び申し上げます。ですが」

こちらも引けない。

「わたくしは異相であり、遅くに両親に生まれた子です。兄弟もおりませぬ。いずれ時が来て父母が身罷ってしまえば、異相がゆえ、この国にあっては誰にも頼れぬ身です。少しでも、確実な足場を得なくてはならぬのです」

「……姫には、あの園遊会に集う方々がいらっしゃるでしょう。あまり知られたことではございませぬし、わたしもこの眼で見るとまでは存じ上げませんでしたが、この京にはそれなりの数の胡人があります」

「わたくしの父は、^{ほとけ}佛に従う者です」

藤は、既に聞き知っていたのか、動じない。

「多くの胡人は祇教徒でございます。数少ない佛教徒は、軒並み独り身の僧侶。かと言って、ふつうの大和人であればわたくしのような異相を娶ろうとはしないでしょう。ですから、どうあっても、わたくしはあなたの妻になりたいのです」

藤はしばし、また視線を落として黙り込んだ。

洛澄は身じろぎしつつ、次の言葉を待つ。

「姫のご事情は、承知いたしました。しかし、この藤ならと仰せになるのは、いかなる訳でございましょう」

「……失礼ながら、お聞きしました。名家の出でありながら異相の卑しい庭師などに弟子入りした藤さまの許へ、参りたいという娘は中々いないだろうと」

この言にはカームラーンが文句をつけた。

「卑しいとは聞き捨てならぬが」

「失礼いたしました」

洛澄は目を伏せる。

藤が一つ、面倒そうに息を吐いた。

「卑しいかはともかく、わたしに関してはさして間違ってもおりませぬ。しかし、だからと言って姫がまるで馬でも求めるかのようにわたしの所へいらしたというのは、いかにも面白くもない。第一、師匠は違う考えをお持ちですが、わたし自身は、さほど妻が欲しいとも思わぬのです」

どうも、失敗したらしい。藤の言葉にぐいと涙腺が内側から押されたが、なんとか堪えた。もっとも、気まずさに俯く顔を止めることはできなかった。

「おい、フジ。おぬしの意地の悪さは承知しているが、それにしても言葉を選べ」

「そもそもの初めに、わたしの名を出したのは師匠でございますね？ 元凶はあなたというわけですな」

「おい、おい」

「姫」

呼ばれて、上気した顔にぐっと力を入れて顔を上げた。

「ご存知ではなかったようですが、わたしも相当な偏屈者でございます。意に沿わぬことはやりとうないのです。家を出でてここにいますのも、それ故でございます。もっとも、その一つの因果として姫とこうしてまみえることになりましたのも、ご縁というものではございましょう」

藤が何を言おうとしているのか、今ひとつ掴みかねた。とりあえず、

「はい」

と頷いておく。

「時に、姫は歌をお詠みになりますか」

「歌、ですか。恥ずかしながら、大和歌はよく知りませぬ。文字も、読むことはできますが、書けぬのです」

「ふむ」

洛澄の訝しく見るのを受けて、藤は言った。

「まずは歌を交わすがよろしいかと思ったのですが。大和の男女は、歌を通して心を通わせるものでございますゆえ」

しばらくその意が呑みこめなかった洛澄だが、やがて気づいて目を丸くした。

つまり、考えてやってもいいと言っているのだ。

「藤さま……」

「はい」

「わたくしのこと、お嫌いになったのではないのですか」

「いかな藤とて、そこまで薄情ではございませぬ」

面白くもなさそうに言われた。

カームラインが今一度口を挟む。

「歌は交わせずとも、言葉は交わせるだろう。フジ、機会をつくってやる。ようは、ラクシユミーを大して知らぬうちから、結婚を決めるのは嫌だというのだろう」

藤は肩を竦めた。

「まあ、そうですね」

「なら、決まりだ。ラクシュミー。フジと話す機会をつくってあげるから、おぬしはその間に、このフジと母御とを説得なさい。それでよいだろう」

「は、はい」

反射的に答えてから、カームラーンの言葉を反芻する。

約束は取り付けられなかったが、つまりは、待つてやっていいということだ。洛澄の頑張り次第で、どうにかなるかもしれないということだ。

そこまで考えて、身体からほっと力が抜けていくのを感じた。知らずのうちに、相当強張っていたものらしい。不安はまだあるが、少なくとも今日、希望が潰えることは無かったのだ。

「そうと決まれば、この豆をお食べなさい。妻がせっかく炒ったのだ、手をつけなくてはもったいない」

それで初めて、目の前に炒り豆の入った器が置かれていたことに気づいた。緊張のあまり、目にも入っていなかったのだ。

殻を歯で割り、じわりと塩味が口じゅうに広がっていくのを感じながら、カームラーンの妻を思い浮かべた。そういえば彼女は大和言葉が話せないはずで、どのように藤と会話しているのか……カームラーンが間に入っているのか、それとも藤もいくらかは洛澄たちの言葉がわかるのだろうか、などとぼんやりと考えた。

「まったく、こやつは本当に頑固者な上に、身の程知らずときた。こんな器量よしをむげに扱い、あまつさえ泣かせてしまうとはな」

カームラーンがぼやくのに、洛澄は

「泣いてはおりませぬ」

と訂正しておいたが、藤は無言で豆を噛み砕くばかりだった

帰り道、カームラーンに藤は何歳かと訪ねてみた。

「十九だそうだ」

「……随分、お若く見えるのですね」

しかしそれで納得がいった。四つも上では、あのようにあしらわれてしまっても仕方がないというものだ。

「フジに言わせれば、胡人が早く老けすぎということらしいがね」

ひどい言い様だが、あの男らしい。

我知らず、笑ってしまった。

洛澄の世界が未だ母であり、父であり、^{やしきのうち}邸内^{オアシス}にしかなかった頃、母はよく昔語りをしてくれた。六つになるまで外に出たことのなかった洛澄にとってそれは世界そのものであり、塀の向こうにはどこまでも続く砂漠と星々のような^{やしき}緑地^{やしき}が点々と広がっているものだと思っていた。もしも誰かに呪いをかけられて蜂になってしまったら、きっと^{やしき}邸^{やしき}を飛び出して、きらめく王宮におわす孤独な王子さまに助けを求めに行くつもりだった。そして大冒険の終わりには、橘の実に変じて、その黄金の皮を割って美しい娘に生まれ直すのだ。

六つの時、洛澄は大和言葉を解さず、父母とカームラン以外の人間を見たことすらなかった。慮った父は、ついに洛澄を連れ出した。お役目にも、園遊会にも、どこにでも連れて行くようになった。

初めて外に出た時のことは、実のところ、あまりよく覚えていない。たぶん、目新しいものばかりで圧倒されて、立っているだけ、歩くだけでも精一杯だったのだろうと思う。

それでも、やがてじわじわと落胆が襲ってきたことは確かだ。母の語ってくれた、きらびやかで、熱く乾いた風の吹く世界は、海という途方もなく大きな川の向こうの、そのまた向こうの更に向こうにあるのだと、いつのまにか悟っていた。

父についてお宮に行けば、美しいものや面白いものごとはたくさんあった。園遊会では、同じような年頃の子もたちと遊べて、腹の立つことも多かったものの、やはり楽しかった。洛澄は、大和が好きだと思う。

だけど夜半に母と父と、庭の片隅に座り、月を見上げてのんびりと過ごす時、洛澄の心は遠い母のふるさとへ飛ぶ。この庭には、カームランの祖父母が海を越えて持ち込んだ、胡人の住処以外では滅多に見られない花々が贅沢にもふんだんに植えられて、今もカームランが定期的に訪れて手入れしている。木々の合間、川岸の花々に、洛澄は戯れる七人の姫を夢想する。

アフシャーと母に呼ばれる時、そういった諸々が一挙に身体を駆け抜けて、毎日のことであるのにいつでも心がふるえた。それこそ、^{アフシャー}小雨^{みなも}ににじむ水面のように。

だから実のところ、母^{サマン}茉莉花^{サマン}を説得するというのは、言うほど気軽にできることではないのだった。

父には、洛澄には胡人と一緒になってもらいたいと言った母だったが、本当のところ、相手が誰であろうと洛澄を外に出したくないのだと思う。母が認められるような結婚相手——この邸にかかった郷愁という名の魔法を壊さない者——は、少なくともこの平城の京にはいそうになかった。

母のふるさとを想い、遠い夢を壊されることなく日々を過ごしたいという気持ちは、洛澄が母と共有するものでもあった。何より母は、六つまでの洛澄の世界そのものであったと言ってもけして過言ではないのだ。

洛澄が藤と会ってきたことを告白した時、母はあからさまに怒りこそしなかったものの、目つきは明らかに非難がましかつた。翡翠の瞳をきゅっと洛澄に向けて、

「そうですか」

とだけ言った。

このような母だから、逆に何かを言うことが難しい。気持ちを言葉にする人ではないけれども、隠す人でもなかった。言われてもいないことに反論するのは気が引けるが、明らかな意思を見ない振りすることもできない。奔放で時に身勝手な父と暮らす上で得た、生活の知恵なのかもしれぬと思わなくもない。

父の親友たるカームランが来て洛澄を連れ出すことは、さほど珍しいことではない。女子どもだけでは、ましてや娘一人だけで出歩くことなどもってのほかだが、親も同然のおじさまと一緒にならば問題はない。父が忙しい時、園遊会に行くのに迎えに来てくれるのもカームランだ。だから母も、いつも通り送り出してくれたのだった。

素直に、夫候補に会いに行くのだと言っておけばよかったのかもしれない。しかし、先に言ってしまっていたらやはり、止められていただろうとも思う。

「よい人でした」

それだけ告げてみた。

「そうですか」

また同じ応え。

「夫にも申し分ないお方だと思いました」

これには、答えは返って来なかった。

考えてみれば、どちらにしろ、これ以上藤について語れることは今のところ、特に無いのだった。大和人の容姿を褒めたって母の心には響かないだろうし、少しいじわるな方かもしれないなどは、まさか言えるわけがない。

そして、まさか「あなたの亡くなった後のことを考えて」是が非でも彼と結婚したいのだ、などは、さすがに本人に向かっては言えないのだった。

こうしてみると、とりあえず会って、話す機会をつくって……というのは、ますます良い考えなのだった。藤のことをちゃんと知れば、母の心に訴えられそうな要素も見つかろうというものだ。

あの中々表情を動かさない若者とまた会うのは、実のところそれなりに怖く、あまり気の進むことではなかった。しかし「母に話すためにも、藤のことをよく知る」という目的ができて、少し前向きに考えることができるようになった。

その次の園遊会の時、迎えに来たのがカームランではなく藤だったので、洛澄はびっくりした。

「師匠に遣わされて参りました」

機会をつくるとは、こういうことだったのか。

しかし、母は藤だけの同伴では外出を許してくれないかもしれぬと顔を曇らすと、

「我が子も同然の弟子を遣わすので、甥か姪のつもりで扱ってください、とのことですよ」

……確かに、それではむげにもできないかもしれない。

相変わらず、読めない顔である。

母の許へ案内しようと背を向けかけたが、藤が目を細めて庭を見回しているのに気づき足を止める。

「うちの庭は、やはり他とは違いますか」

庭は洛澄にとって特別なものなので、あまりじろじろと見られるのは、言ってしまえば不快だった。

しかし静かに返ってきた言葉は、意外なものだった。

「ええ。師匠から話を伺い、一度この目で見ようと思っておりました。常世のような……この世とも思えない、まさかこのような場所がこの京の一角に隠れていようとは」

藤は感動しているらしい。そう思うと、声もいくらか上ずっているように聞こえてくる。

己の大事なものを褒められるのは嬉しい——特別に思い入れのあるものであれば尚更。洛澄の気持ちは一気に弾んだ。

「もっと早くにいらしていれば、もっとずっと、この世ならぬ光景が見られましたのに。春がわたくしの一等の気に入りののです」

夏には夏の花がある。蓮に桔梗に鳳仙花、^{いろどり}彩は季節と共に移ろう。が、冬を裂いてまろび出る花の^{かぐわ}芳しさ、華やかさには特別なものがある。と、洛澄は思っている。

「おじさまは、いかようにこの庭のことをおっしゃっていましたか」

「若い時分の仕事ながら、今もってこれ以上に庭は作れていないと造れていないと」

聞いたことがあった。その時も誇らしく思ったが、庭造りの弟子である藤にまで言うということは、真実そう思っているということだ。

「姫のお父上は奥方さまの望むままのお庭になさりたいと望まれ、師匠は、あれほど難しい仕事は無かったが、あれほど臨み甲斐のある仕事も無かった、と申しておりました。己に流れる胡人の血をあまで実感し、思い知らされたことは無かったとも」

藤から語られるカームラーンは、確かに洛澄の知っているおじさまであるのにどこか違う人のようにも感じられて、カームラーンにはカームラーンの歴史があり、洛澄の知らない顔もあるのだと何とはなしに思った。

「わたくしにも、母にも、特別な庭です。わたくしもまた、おじさまと同じようにこの血の出る所を訪れたことも、目にしたこともございませぬ。けれどもこの庭にいと、少しはそこに近づけるような気がいたします」

だから、藤がその美しさを認めているというのは、きっと母にとっても大きな意味を持つはずだ。

「姫は、師匠の造った他の庭をご覧になったことは」

「いえ。あ、いえ、あの園遊会の……胡人^{ちょう}町の、おじさまのお父上さまがお造りになり、今はおじさまが手入れをなさっているお庭を除いては、ですけれど」

「そうですか。しかしこの最高傑作を日々目にして、その中で生活しておられるのですね。……大変、羨ましい」

眩しそうな目は、本心からのものに違いない。

カームラーンの弟子なのだから当たり前なのかもしれないが、この人は本当に庭が、庭造りが好きなのだ。

藤は更に続けた。

「庭は世界の縮図だと……そのような考えが、ございまして。庭は、いながらにして宇宙を体感できる所だということです。わたしはその哲学を好んでいましたが、師匠はまた違うことをおっしゃる。この世の楽園こそ、庭のあるべき姿だと。ここに参り、初めてその意味が分かりました」

そういえば、と洛澄は記憶を手繰る。

以前、「父の言ったことだが」と、何のきっかけからか、話してくれたことがあった。

——『この、遅れてはいても豊かな国の人々に、我々の庭の真の価値は^{バード}けしてわかるまい。砂漠の中、星のかけらそのもののような水源を見つける感動は生涯知るまい。だが京が発展していく今、我々の仕事は必ずや大きな意味を得る。あの美しい緑地を訪れる^{いとま}暇を無くしていく^{みやこびと}京人たちに、我らが庭は^{パイリダエーザ}楽園となるのだ』

胡人の言葉を解さない藤に、どのようにこれを伝えたらよいものか、きっとカームラーンはとも苦労したに違いない、と洛澄は想像する。

「藤さまは、どのようにおじさまの下で学ばれるようになったのですか」

ずっと向けられた目に、睨まれた心地になって肩を竦めたが、またすぐに逸らされた。

しまった。気に入られなくてはいけないのに、呆れられてしまったかもしれない——これしきで、おどおどとしているようでは。

「師匠が、我が生家の庭を造り変えるところに居合わせまして。わたしもあのようになりたいと、思ってしまったのですな」

過去を見るように目を細める。

「この庭ができるところに、居合わせてみたかったものです」

「今度、おじさまが手入れなさる時にでも、ご一緒にいらしてはいかがですか」

「……今度、師匠に伺いを立ててみましょう」

表情を変えない藤の返事に、期待を込めて微笑みで返してみた。少々、引きつってはしまったものの。

当然、母はよい顔をしなかったが、カームラーンの「我が子も同然」の言葉に渋々ながら外出を許した。

「母さま、藤さまは以前からこの庭をご覧になりたかったそうです。とても美しく、常世のようだと、おっしゃっていただきました」

しかし母は冷たかった。

「大和の男などに、この庭の価値がいかほどわかりましょうか」

洛澄は、自分がとても嬉しかった分、母のこの反応はとても悲しかった。

藤は宮式の礼——ひいては唐式であり、胡人の間でも通用する——をとったまま顔を上げない。どの道、洛澄が通訳をしなければ今の会話は伝わらないのだが、声の感触でおぼろげには察しただろう。

道すがら、藤が尋ねてきた。

「失礼ですが、姫はどちらで大和言葉を覚えられたのですか。母君はお話しにならないようですし、わたしの知る限り、胡人の娘たちはほとんど大和言葉をご存知でないようですが」

「わたくしは、昔……^{ふたとせ}二年ほど前までは、父に連れられ、いくらか外に出入りしていたのです」

^{わらは}童 だった洛澄のもとへ、女の月のしるしが来る前のことだ。

「外と申しましても、お寺と平城宮ぐらいなのですけれども。お坊さま方、学者さま方、それから時にはお宮の^{ひめみこ}皇女さま方や^{にようぼう}女房の方々にも、物珍しさからか、かわいがっていただきました」

語りながら、懐かしさに襲われる。当時は、特に宮中ではまるで人形か見世物のように扱われるのが嫌で仕方なかった。幼い子に、無邪気に目に指を突っ込まれそうになったこともある。瞳の色が珍しかったからだ。髪をほどかれ、引っ張られるのも日常茶飯事だった。

そんな日々も、今はむしろ恋しい。

「なるほど。それで、いわゆる胡人の訛りをお持ちで無いのでございますね。文字もそちらでお学びに？」

「はい。特にお寺では、子どもなど他にはあまりありませんでしたから、誰かしらお話を読み聞かせくださいまして、特に教わることもなく覚えました。父は皆さまと。唐言葉まじりの大和言葉でお話しますが、わたくしは唐言葉も韓言葉も、聞けばそれなりに解ります」

これには藤が目を瞠った。

「それでは、わたしなどよりは余程学がおありでらっしゃる」

「いえ、まさかそのようなことは」

感心されて、実のところ内心、かなり鼻が高い。が、一方で言葉に関して、洛澄は劣等感も持ち合わせている。どれも中途半端なのだ。一番自信があるのは胡人の言葉だが、これだって帝国系の子どもたち——今は亡き帝国出の二世や三世たち——には訛り持ちとばかにされる。

「時に、姫は市をご覧になったことはございますか」

唐突な話題転換だった。

「市……ですか？」

首を傾げる。父が時折「市で得た」と言って食材や物品を、持ち帰ることがあったが、連れて行ってもらったことはないので今一どのような所か理解していない。

「いいえ」

「ごさいませぬか。では、案内いたしましょう。折り良く、今日開かれています」

「……え？」

戸惑ったのは、藤が申し出たことそのものへの驚きでもあり、また父やカームラン以外の異性ととの、未知の場所への伴行きともゆに対する不安でもあった。そもそも、許されるだろうか。あるいは、洛澄自身、簡単に受け入れてしまってよいのだろうか。

「わたしも、家を出でるまで訪れたことはございませんでしたが、あれは面白い。一度はご覧になって、悪いことは無いでしょう」

相変わらず淡々と告げる藤だった。

園遊会に着くや二人を呼び寄せたカームランに藤が許しを請うと、カームランはあっさり承諾した。そのうえ、藤は「後ほど」と言ったのに、「日が高いうちに」などと、着いたばかりなのにさっさと追い出されてしまった。日など、まだ中天に昇っていくらも経っていないというのにだ。

園遊会はここ二年来、洛澄に許された唯一の外出で、他人と触れ合う機会であった。藤といるのはまだ気後れするし、少しも留まらなかったのにはいささかがっかりした。もっとも、今日に限ってはちよっと異様な衆目を集めていたことも確かで、丁度よかったのかもしれない。普段は父の奇人ぶりに同情してくれる気のよい娘たちも、今日ばかりは質問責めを浴びせたに違いなかった。

二人で出かけていくことでどのように取り沙汰されているかを思うと居心地が悪かったが、ひょっとしたらカームランは外堀から埋めて——つまり周りに藤と洛澄が一緒になるのだと認識させて、藤をその気にさせ、母が諦めざるを得ないように仕向けようとしてくれているのかもしれない。そう思いついてからは気を取り直した。そう、どんなことをしてでも、この若者を夫にしたいのだ、洛澄は。カームランは洛澄の味方だ。当の洛澄が気後れしている場合ではない。

市は確かに、洛澄がそれまでちっとも知らなかった世界だった。

まず、人が多い。土の地べたに座っている人を、胡人以外では初めて見た。ものすごい喧騒で、初めは人の声とも思えなかった。行き交う人の多さからか、砂埃が待っている。

「軒の下で座っているのが売り手だそうです。わたしは初めそれがわからず、どんなもの知らずかと呆れられました」

藤の説明に、洛澄が最初に思い浮かべたのは駱駝らくだ売りだった。それから、麦売り。主人公が市バーザールに立ち駱駝を売る話はいくつもあり、砂埃も相まって、ターバンを額に巻いた男がどこかの角に立ち、駱駝を売っている幻想にとらわれた。

むろん、儂い夢である。

しかしその淡い落胆を拭い去るに充分なぐらい、市は目新しいものの宝庫だった。
いつか父が買って来た履物が見える。母がどう料理してよいものか見当もつかなかった野菜もある。

しかし大半は見たことの無い、未知なる物だ。

「あれは、どのようなものでしょう」

藤が答えてくれる物もあれば、

「わかりかねます」

の物もあった。

全ての物が物珍しく、夢中になりすぎて時々、藤とはぐれてしまったのではと心配したが、振り返るとちゃんとそ知らぬ顔で付いて来てくれていた。

道行く人や物売りには、洛澄がそれまで見たことのないほど、土けた、簡素な装いをしている者も多かった。

ある時、すれ違った男がはずみで洛澄の被衣かづきの下の顔を垣間見て、

「ぎゃっ」

と声さえ上げて逃げ出した。

「なんと無礼な」

藤は顔を顰めたが、洛澄にはよく覚えのある感覚である。

宮中でも、皆そのうちに慣れてはくれるものの、初めは、洛澄を目にした途端固まったように動かなくなる女房、泣き出す子ども、と散々な反応をされるものだった。

ここしばらく、胡人以外と交わることがほとんど無かったため忘れていたが、改めて己の異相を思った。すぐに桃色を帯びる白い肌に、血の通っていないような（そう見えるらしい）青い瞳はこの国では、辺境の東人あずまびとや、言葉こそ違えど見た目に近い唐人からびとの訛りなど問題にならぬほどの、明らかな異分子なのだ。

一通り市を見て回り、さすがに疲れを隠せず、会話が無いもやむなしと洛澄が思い切ったため、帰りの道中は静かだった。

まだ洛澄に馴染みのある通りでは無い……と、道脇の塀の様子を何とはなしに観察していると、藤がふいに口を開いた。

「本日は、何もおっしゃらないのでございますね」

顔を向ける。

「何を、でございますよう」

「今日はまたどのように、妻にしろと迫られるのかと思っておりましたので」

顔が熱くなる。

「そのようなことを今また申しあげてしまえば、藤さまはわたくしをお嫌いになるのではございませぬか」

結局のところ、洛澄がいまいち強気に動けないのがそれが理由だった。前回手痛い思いをしたからだ。

「さあ、どうぞごさいましょうね」

涼しい顔で言われ、さすがに腹立たしくなった。

「藤さまは、ひょっとしてわたくしの顔がお怖くていらっしゃるのではないですか」

これには眉をひそめた藤だった。

「あのような無礼な輩と一緒にほしくないでいただきたい」

「けれどあなたとて、わたくしの目を見ようとはほしないではございませぬか」

「あまりご婦人をじろじろと見るのも、失礼というものでしょう」

「わたくしは気にいたしませぬ。怖くないとおっしゃるなら、今ここでわたくしの目をご覧くださいな」

むっとした風情で目を合わせたか、洛澄がまばたきすらする前に逸らされてしまった。

「やはり、怖くてらっしゃるのでしょうか」

すっかり詰る調子の洛澄に、藤は向こうを向いたまま溜め息を吐いた。

「姫は、わたしに気に入られたいものかと思っておりましたが。思い違いだったようで」

ハッと我に返る。つい、うっかり苛立ちに身を任せてしまった。己の特異さを改めて思い知らされたのはつい先ほどのことで、尚更、守ってくれる夫という存在が必要だと、認識したばかりだというのに。

青ざめながら、しかし洛澄は理不尽さも感じていて、謝る気持ちにはなれなかった。

何と言おうと、藤が洛澄と目を合わさないのは事実なのだ。

藤が再び、今度は深い溜め息を吐いて、それから言った。

「文字は、お読みになられるのでしたね」

「……はい」

何の話かと思つめると、藤はやはり目は合わせなかったが、こう続けた。

「後ほど、歌を届けます」

——^{わだつみ}海神の覚えめでたき娘の翠玉の瞳は、天にあって崇められる月の輝きのように、直視することは叶わない

後日カームランを経て手渡された木簡に書かれた歌は、そのようなことを歌っていた。

一体どのような顔でこんな歌を詠んだのだろう。ごまかされたような釈然のしない感じは捨てられなかったが、顔にのぼる血は自覚せざるを得なかった。

ことあるごとにその歌を読み返しながら、やはりよくわからない男だという思いと共に期待をも深める。

夕立が遅くに来て、茜と藍に染まりゆく鉛色に沈む空を見ながら、洛澄はぼつりと呟いた。

「藤さまが、その月を包む夜の^{とぼり}帳になってくださればよろしいのに」

それから自分で照れて、あてもなく早足で邸内を歩き回った。

四

母は頑なだった。

洛澄は、知る限りの藤の話をするのだったが、母は端正な眉を動かしてもせず、「そうですか」

と例の口調で言うばかりである。

母の心を動かすにはどうすればよいかを考えつつ、もっと藤を質問責めにして母の気に入るような話を引き出せなかった我が身のふがいなさに歯噛みをしているうち、はたと思い至った。

母が話をする相手といえば、まず洛澄、次に父で、その後がカームランだ。

その次は、無い。母茉莉花サマンはもう何年もの間、この三人以外の人間と言葉どころか目も交わしていないはずだった。おまけに、この邸やしきを出ることすら無い。

それでは、頑なになるのも仕方なしというものだ。

洛澄が園遊会を楽しみにする理由は色々あるが、大きな要因は、外に出るだけで何か滞ったものが押し流されるように感じられるからだ。邸に留まり、同じ人にしか会わず日々を過ごすのは楽し気安いが、少しずつ沈殿していく心の澱が、気づかぬうちに層をなしてしまうようなところがある。その正体を洛澄は知らないが、この狭い邸内でさえ掃除を欠かせばすぐに埃まみれになってしまう。心にも同じことが言えるのは、全く自然なことに思われた。

「母さま。次の園遊会には、母さまも一緒に参りましょう」

この提案に、母の答えは短く、すげなかった。

「嫌です」

「ですが、母さま。考えてみますれば、母さまはもう何年も、この邸を一步たりとも出ず、家族以外の方にもお会いになっていません。きっと、よい気分転換になります」

「アフシャーン。母は嫌だと言いました。絶対に、行きません」

洛澄は肩を竦めた。

年寄りとは、知恵はあっても頑固なものだと決まっている。

しかし当日無理やり連れ出してさえしまえば、なんとかなるだろうと踏んだ。

その当日、洛澄は朝から母の説得にかかった。

「母さま、共に参りましょう。きっと楽しいです」

「母さま」

朝からしつこく付きまとわれ、初めは一々否やの答えを返していた母も、やがて迷惑そうな一瞥をよこすだけで無言でやり過ごすようになる。

その反応に、勝利の手ごたえを得る洛澄だった。

了承の言葉さえ引き出せないものの、この分では嫌々ながらも引きずり出されてくれそうである。

しかし付きまとう洛澄に、茉莉花は突如決然として振り向くと、冷たい声を荒げた。

「アフシャーン、いいかげんになさい。おまえがどのように言おうと、この母を頷かせることはできません」

放たれた本気の苛立ちに、びくりと洛澄は固まる。

すうっと冷えていく身体の中、口だけを動かして掠れた声で返した。

「なぜですか。何ゆえ、そのように頑ななのです」

「祖先を同じくするはずの人々に、あのような目を向けられ疎まれるのは我慢がなりません。旦那さまはあのような方だし、男の方だから何もお感じにならないようだけど、おまえももう大人の女です。異宗の女がどのように見られるのか、わからないわけではないでしょう」

過去の苦い経験をほのめかす厳しい口調に、言葉が出ない。

しかし決定的な打撃を与えたのは、次に向けられた一言だった。

「アフシャーン。いいかげんに、おまえの身勝手な願いに母を巻き込むものではありません」

母の言う「洛澄の身勝手」を、それはむしろ母の身勝手だと反発することが、洛澄にはできなかった。

思い当たる節はいくらでもあったからだ。

初めて園遊会に出てきた頃、そこはけして楽しい場所ではなかった。女たちのほとんどは、我が子に向けるぬくもりのいくらも洛澄にくれなかったし、子どもたちはもっと露骨な嫌がらせをした。いつのまにか順応してしまったのですっかり忘れていたが、そういえば昔は母に泣きついたこともあった。

しかし今、胡人の園遊会を楽しみ、そこでの繋がりを大事に思いながらも洛澄がはなから胡人との縁組を諦めているのは、今でも越えられない壁があるからだ。

洛澄は母が初めから引きこもっているような気がしていたが、実際には母は洛澄が生まれるまでの三十年近くを生きていて、洛澄よりもずっと広い世界を知っているのだ。この大和の京^{みやこ}に来てからだって、洛澄が産まれるまで数年はあったはずで、その間じゅうずっと家に引きこもっていたと思う方がおかしいのだ。何より、あれほど故郷を恋う母が、何の由もなしに他の胡人と会わないわけが無い。少し考えればわかることだった。

一番響いたのは、洛澄が母の心を己のために利用したいのだという指摘だった。ちっとも否定できず、浅慮を自覚するほか無いのだった。

藤が迎えに訪れた時、洛澄はまだ呆然としていた。

藤の無感動に見える顔を目にしながら洛澄に浮かんだのは、自分はこの人のことも都合よく利用したいだけなのだ、という発想だった。

初対面の時に藤があのように怒ってみせたのも同じ理由からだろう。今までだって十分に理解しているつもりだったのに、今は自分の思惑がとても浅ましく思えた。

言葉少なな洛澄に何を思ったか、藤が訊いた。

「先日お送りした文は、しかと届きましたか」

「はい」

あの歌を思い出し、洛澄はいくらか顔を赤くした。

「もったいのうお歌を、ありがとうございます。……わたくし、あのような失礼なことを申しましたのに」

「受け取っていただけたならば、よろしいのです。お元気のあられぬご様子、あるいはまだ先日の市でのことをお気に病まれているものかと」

「いえ。まさかそのような」

「そうでしたか。いえ、あの混沌をご覧になって姫がどのような反応をされるか見ようは思ったものの、あまりお嫌な思いをさせてしまったのでは申し訳ないと思ひましてな」

洛澄は首を傾げた。

「反応、とは」

「姫のお育ちも、教養も、稀に見るものでございますゆえ、あのような所に参ればどのように思い、どのような顔をされるのか、興味を持ちました」

「まあ」

まるで犬か馬でも観察するような口調である。少しばかりムツとしたが、おかげで久々に外の、それも初めての場所へ行く機会を得られたことはありがたかった。

「わたくし、とても楽しみました。傍目には、明らかではございませんでしたか」

「あの無礼な男と行き合うまでは、そうでした」

落ち込んだところまで、目に明らかで無くともよかった。

「……申し訳ございませんでした。せつかく、お連れいただいたのに、興ざめる振る舞いをいたしてしまって」

「お気になさらず。無礼に心を痛めるのは至極当然のこと。第一、今にして思えばかんざしの一つでも買ってお贈りすべきところを、わたしときたら全く気の利きませんでしたので、お互いさまと、いうところでございます」

今更だが、藤は実は優しいのだ。慰めてくれている。

洛澄はなんだかいたたまれなくなって、自分の市での「反応」とやらを話してみようと思った。

「あの市に参りました時、わたくし、母の昔語りに出てくる市を思い出しました。それで思わず、お話と同じように、こぶ馬を売る男がいらないかと探してしまいました」

藤は興味深げな視線を送ってくる。

「こぶ馬、とは」

「背にこぶのある馬でございます。砂漠では牛のように、物を運んだり人を乗せたりするそうです」

目を細める藤。しかしいくらか楽しそうに見えた。

「面妖な」

こうして気持ちや経験を赤の他人と分け合うのは初めての体験である。

とてつもなく、ドキドキするほど、嬉しいことだ。

やはりこの人の妻になりたい、と思うも、同時に、このような人を一方的に利用することへの罪悪感と、己のすべきことへの戸惑いもいや増すのだった。

その晩、庭の橋で足をぶらぶらと水に遊ばせていると父が来た。

「ラクシュミーや」

生温い夜風が頬を撫でる。

「サマンと何かあったか」

どうもぎくしゃくしている母子を感じ取ったらしい。

この父のことを、奇人だ変人だと言いはするが、実のところ、洛澄自身はあまりそうも思わない。周りの誰もがそう評して、時に同情を、時に好奇の目をその娘たる洛澄に向けてくるので、そういうものだと思うようになった。

だが父を突き動かす論理は、余人にはどうあれ、洛澄にはけして理解しがたいものではない。どのように振舞えば変人と称されるようになるのか、の参考にはなるが。

もともと、それは若い頃の父を知らないからこそ言えるのかもしれない。

洛澄の覚えている限りでさえ、父は確実に大人しくなり、落ち着いてきている。夢かもしれないと思う記憶の一つに、激昂して怒鳴る父、というのがある。前後の文脈は覚えていないし、今の穏やかな父からは信じがたいものがあるが、同僚たちの話しぶりから察するに、短気な父が激情を抑えきれず行動に出してしまうことなど、別に珍しくも何ともなかったようだ。

「父さま。母さまは昔、園遊会で嫌な思いをされたのでしょうか」

見上げると、父はしみじみと

「おまえがわしに似ず親孝行に育ってくれて、父は真、嬉しいぞよ」

ととんちんかんに頷いた。

「この頃とみに、故郷の父母のことが思い出されてな。だがどれほど恋しく思おうと、過去の振る舞いを悔やもうと、今更どうにもならぬ。おまえならこの父のように、何十年も経って後悔にむせび泣くことも無いであろう」

父 シャーヤーン 舎夜 はここ一、二年、急激に老いた。爺と呼ばれるほどではないにしろ、顔に刻まれた皺はもはや明らかなだ。毎日のように連れ立って歩いた頃とは、まるで違う人間になってしまった感がある。経文の解釈や翻訳に取り組む際の嬉々とした様を知っているので、尚更今の父は小さく感じる。

かつて母一色だった世界は、六つの時、父によって風穴が開けられた。「外を知る者」として、この邸で父と洛澄が共有した世界が母を苛立たせることはままあった（父がそれに気づいていたかは微妙なところだ）。幼い頃の洛澄には、外のことしか話したくないような時期もあったのだ。父は確かに、洛澄の世界の半分を担っていた。

しかし二年前からは違う。付いて出られなくなって初めて分かったことだが、仕事狂いの父が邸にいる時間は驚くほど少ない。気がつけば父は「外」の一部、ただしとても近いのに奇妙に遠い、そのような存在になってしまった。

藤との出会いにより、ますますそうなってしまった感は否めない。会って間もない人がこれほど大きな存在となってしまうというのは、どこか空恐ろしくもある。逆に言えば、それほど父という人が洛澄の中で薄くなってしまっているのかとも疑えて、えも言われぬ焦りをも感じている。

「父さま」

相変わらず、人の話を聞いているのだから、いないのだから分からない父を睨みつける。飄々とそんな洛澄を受け止めて怒らない、こういう気安さは、昔から変わらない。

「なんだい」

「母さまのことです」

「ああ」

わざとらしく驚いたが、すぐに観念したように息を吐いた。

「あれには、本当に苦勞をかけているな。それこそ今更だが、わしなどと一緒になったばかりに」

肯定ということらしい。この負い目が、近年の妻に対する気弱さとなっているのだろう。

今、洛澄も負い目を感じている。主に、母と藤に対して。

己の幸いのためにこのまま邁進すれば、待っているのは今の父のように、伴侶と親に負い目を抱え溜め息を吐く日々かもしれない。

いやに鮮明に想像できた。

自らの行動の根拠を揺らがせた洛澄は、しかしそれまで通り、藤とは機会ある毎に二人で話をし、母には藤について報告するということを続けた。

が、それ以上の何をもする気持ちになれず、気づけばどちらも変わり映えのない日常と化してしまった。庭の手入れの時にはカームランは藤を伴って来るようになった。

焦りは常にある。

自分自身の未来を危ぶんでの焦りと、このままではただ無為に藤の時間を奪っているだけだという、罪悪感にも似た焦りである。

問題は何を優先させるか——自分か他者か——だ。分かってはいるものの、決めることができずにいた。我が身はかわいい。だが周囲に強いた迷惑の重さに押しつぶされて一生を過ごすのも、結果的には我が身のためにならなさそうだ。

藤がそっけないながらも洛澄を気遣ってくれたり、親しみを示してくれるたび、洛澄は喜びと共に苦悩をも深くした。

ふたつき
そうして二月ほどが過ぎ、木の葉が秋めいて色づいて来る頃。
シャーヤーン
父 舎夜 が亡くなった。

五

呆気ない最後だった。しかし父らしいとも言えた。

木の上で降りられなくなった犬を助けようとして、自分が落ちてしまったという。初めはただの打ち身で済むだろうと見られたが、打ち所が悪かったのか、母と洛澄が呼ばれた頃には息を引き取っていた。

そもそもなぜ犬が木になど登っていたのかは、この際問題ではない。

問題は、年甲斐もなく木登りなどした父の方である。どうせ、止められても自分がやると言っ
て聞かなかったに違いない。

思い切り詰ってやりたいほどの考えなしだが、その無謀さはいかにも父らしいのだった。

葬儀は佛式に、寺で行われた。

亡くなって遺体が邸に運び込まれた日こそ静かで、呆然としていて、晩になってようやく実感が湧いてからは夜通し泣くことができたが、翌日からは目も回るような忙しさとなった。

父の職場であった寺院が率先して取り仕切ってはくれたが、やはり家族のしなければならないことは多い。母が大和言葉も唐言葉も解さない分、通訳も含めて洛澄が奔走せざるを得なかった。

洛澄は葬儀に出たことが無かった。初めての親族の死であるうえ、知人の葬儀に赴くのはいつも父一人だったのだ。よって、父の葬儀の準備に走り回っている間は、全く想像のつかないことを、全神経を総動員してなんとか想定して事を進める……といったことの繰り返しだった。

三日目になって、ようやくカームランに知らせるべきだということに考えが至った。二人はあれほど親しかったというのに、これまで全く思いつかなかった。いかに気が動転していたか知れるというものだ。葬式の一日目はもう明日に迫っていた。

慌てて邸に来て、線香の香りの既に染みこんだ遺体に対面したカームランはぼろぼろと涙を流した。あまりの号泣ぶりに、洛澄は自分がひどく薄情な気がしてきたほどだが、最後にはつられて泣いてしまった。母茉莉花も泣いた。

洛澄^{おやこ}母娘は二人とも声を上げて泣く^{たち}性質ではなかったから知らなかったが、涙というのは伝染するものらしかった。カームランに付いて来た藤も、^{シャヤーン}舎夜とは大した面識も無かつただろうに、後ろで静かに目頭を押さえた。

洛澄はこれまでに無く豪快に泣いてしまった。これでかなりすっきりしたというか、まともに悲しんだという奇妙な安堵があった。

カームランは藤を置いて行った。三日間貸し出してくれるという。佛式の葬儀であるので、^{ゾロアスターきょう}

祇教徒のカームランにできることは少ない。

藤も不満は無いようで、普段よりはやや深刻そうなすまし顔で頷いた。

母も何も言わなかった。恐らく、まだまだ心ここに在らず……なのだ。

藤は佛葬に何度か出席しているらしく、洛澄が僧侶たちには遠慮して訊けない事柄について細

かく教えてくれた。加えて、寺との打ち合わせの際も立ち会って洛澄が知らなかったり、気の回らなかったりした部分を補ってくれ、とても助かった。

驚いたことに、藤は尋ねられれば娘婿だと答え、また名を ^{ふじわらのなるひと} 藤原成仁 と名乗った。僧侶たちが居住まいを正していたところを見るに、やはり知られた名であるのだろう。本名を告げた意図もそこにあったのかもしれない——つまり、権威を揮える立場の者が洛澄たちの側にはいるのだと、ぞんざいなことをしたら許さぬ、と暗に牽制したのだ。

洛澄は「娘婿」の言葉に目を見開きはしたが、まだ頭が十分にまともに働いていなかったと見え、本当に衝撃を受けるのは数日後、葬式が終わってからのことだ。

寺での葬式が終わると、今度は胡人たちが、邸を代わる代わる訪れるようになった。

洛澄は虚を突かれたように感じ、母などは露骨に顔を顰めたが、上げないというわけにもいかない。彼らは悔やみを述べ、小さな贈りものを持ち、少しの世間話をするので帰っていった。

一日目は予想もつかぬ訪問だったし、まさか何組も続いて来るとは思っていなかったのもろくなもてなしがでしなかつたが、二日目の午後からは甘味を用意した。

動機が好奇心であるにしても、死にそうになかった人物の突然の死に、また残された家族の孤独に、彼らは大方同情しているようだった。また、長年の疎外にいくらか罪悪感を感じているらしい人も見受けられた。

一度目の訪問の後も、女たちは何度か午後を過ぎしにやって来た。当たり前ながら夫たちも伴って来るので、もてなしがいささか面倒で、おまけに男たちはまず絶対に庭の一角に陣取って座り込むものだから、洛澄はあまり面白くなかつた。父の死を口実に、邸が侵食されているような気持ちにさえなつた。

しかしよい変化もあつた。

母はほとんどの女たちを心にまでは入れなかつたが、一人の例外ができたのだ。

女は丁度、洛澄と母の真ん中ぐらいの年齢で、洛澄は以前から知っていた。まだ園遊会に馴染めなかつた頃から洛澄をかわいがってくれた娘で、今は娘一人に息子が二人いる。持ち前の人懐こさで母の心の垣根を飛び越えた彼女は、やがて女たちの集団訪問が絶えても定期的に訪れた。大抵子どもたちも連れて来て、幼い兄弟姉妹のじゃれ合いは洛澄だけでなく母の顔をも綻ばせた。

一つの季節が終わり、新たな季節が始まる。

常緑の庭からも緑が薄れる、裏寂しい冬が来ると、父の死にまつわるほぼ全ての儀式が終わつた。

その頃には、洛澄も気持ちを固めていた。

カームラーンと共に庭の手入れに来ていた藤を引きとめ、カームラーンには先に帰ってもらった。確認すると、今日はもう他に仕事は無いという。

もう随分と寒くなっていることもあるし、本来は邸内に招き入れるべきだろうが、洛澄はあえて縁側に座ってもらった。いくら母には言葉が分からないとは言え、あまり聞かれない話ではなかったのだ。

母は、このところは藤にも柔らかい態度を見せるようになっていた。庭で働く藤を見てのとか、葬儀の際の助けに感謝してか、あるいは単にこのところの心境の変化によるものなのか——いつまでも若くありそうだった美しい母は、このところとみに歳相応に見えるようになり、しかし以前よりもずっとやわらかな空気を醸し出している——いずれとも分からない。

庭の橘の木はもう実を付けている。冬には眩しい、太陽の色の実だ。

出した茶の器の熱さに、手のひらがじんわりとなった。

「して、話とは」

「はい。大変遅うなりましたが、葬儀の際は大変お世話になりました」

今まで、最中は慌ただしかったこともあり、まともに礼を言えていなかったのだ。

「きちんとお礼を申し上げずに今日まで来てしまい、非常に心苦しく思っておりました」

「あれしきのこと、大したことではございませぬ。そのように改まっておっしゃることではあらぬでしょう」

「いいえ。それはご謙遜というものです。どれだけ助けられたことか。大いなる感謝を、わたくしどもは示さねばなりません。どうか言葉だけでも、お受け取りください。……ありがとう、ございました」

藤は肩を竦めた。

「話とは、それだけでございますか」

「いえ」

洛澄は深く息を吸う。ここからが本題だった。

「藤さま。わたくしのお願いは覚えておいででしょうか」

藤は目を細め、頷いた、ように見えた。

「わたくしは、あの夏の日、この縁談が破談になったとは思わないでいただきたいと、願いを申し上げました。必ず母を説得しますから、どうかお待ちになって、わたくしを妻にしてくださいまし、と」

「覚えております」

「その願いを、今日を限りに取り下げようと思います」

これが洛澄の出した結論だった。

橘の実はややく明るい実を実らせたのに、皮肉なことに、洛澄自身の志向が変わってしまった。橘の実が成る頃には、この縁談も実っているとよいと願ったのはほんの数ヶ月前のことだ

藤は驚いたふうもなしに（内心はどうあれ——この若者は、とにかく、感情が^{つら}面に出にくいのだと、今は洛澄もよく知っている）返した。

「どのようなご心境の変化でしょう」

父が死んで洛澄がしみじみと嘯み締めたのは、この世は洛澄の思惑など全く及ばぬところで動いているということだ。

父の死はその最たるものだったが、たとえば母のこと。洛澄の重ね重ねの働きかけにも全く心動かされなかった母は、しかし洛澄が傍で見ている間にゆるやかに、あっさりと変わった。今、母の世界は確実に広がっている。きっかけが父の死であった点、皮肉というか、切なく思わずにはいられないが、その存在が大きかった分、父の死がもたらした変化は小さくは無かったということだ。

洛澄は胡人たちをいざという時の頼りにはできないだろうと見ていたが、実際には心配して大挙して来た。義理であったとしても、繋がりには確かにあったのだ。僧侶たちにしてもそうだ。父が死んだ途端に他人になるわけではなかった。今も時折、食材など持って世間話に来てくれる。

父の死から三月、以前とさして変わらぬ暮らしを続けていられるのは、ひとえに周りの助けがあるからだ。

してみると、目を閉ざし心を閉ざしていたのは、けして母だけではなく、洛澄も同様だったのだ。

更に心を巡らせてみれば、胡人言葉と大和言葉を話し、唐言葉に韓言葉もある程度解する洛澄は教養があると言えぬこともなく、物珍しい外見であることだし、僧侶たちに口利きを頼めば女房として雇ってくれる家の一つぐらいは見つかるかもしれない。

洛澄が固定概念に囚われていただけで、実際にはいくらでも可能性は広がっている。以前は嫌がったが、たとえ妾になっても、あるいは仮にいずれそれで捨てられても、どのようになったところで、どこかにそれなりに悪くない道は見つかるかもしれないのだ。——見つからないかもしれない、しかし必ずしも見つからないとは限らないのだと、今の洛澄には思えた。

そのように考えるようになった洛澄は、藤をこれ以上己の都合で振り回す必要はないと断じた。洛澄のわがままから開放してやることに決めたのだ。

洛澄がそうしたことをぽつぽつと語り終えると、藤はしばし黙り込んだ。栗色の瞳を静かに巡らして、考え込んでいるように見えた。

「残念ですな」

そう言ってくれて嬉しい。同時に、いかにも別れへの^{まくらことば}枕詞という感じがして、切なくもなった。こうして二人で話をするこも、今日を限りに無くなってしまふのだ。

「わたしとしては、すっかり、姫が我が妻になるものだという気になっておりましたのに」

一泊遅れて、洛澄は顔を上げた。

間抜けな顔をしているに違いない。

藤はまた肩を竦めた。相変わらず、目を合わせると逸らす。

「姫は、どうもこの藤が姫を迷惑がっているものだ^と決め付けておいでだ。しかしながら、姫が初めにおっしゃった通り、この変わり者のところに嫁ごうという娘など、姫をおいて他にありませぬし……何より、わたしはあなたを好ましく思っております。何も独り者であることにこだわ

ることもないと、もうそれなりに長いこと、考えておりましたのですが」

細めた目を、一瞬合わせる。

「全く、残念です」

「藤さま」

洛澄は、開いた口が塞がらない。

「その。あの……」

言葉が繋がらない。

「その、……真ですか」

「戯れで、娘婿だと自称したりなどいたしませぬ。てっきり、分かっておいでかと。あのような嘘を平気で言う厚顔な輩だと思われていたとは、全くもって心外でございます」

「いえ、ですが」

物事を進みやすくするためかと思っていた——というか、そうに違いないと自分を納得させていた。大和人の婚姻感覚は胡人よりも緩いと聞いたこともあったし、そのように偽ることも大したことではないのだろうと。

ふいに目頭が熱くなり、留める間もなく涙が溢れてきた。

たがが外れたように、感情とは関係のないところから涙がどろどろどろどろ零れ出てくる。止めようにも、身体を駆け巡る^{ぎよ}御しようのない何かは、けして言うことを聞いてくれず、洛澄はしゃくりのしすぎで息ができなくなりそうだった。

しかしもしもその何かに名を付けるとしたら、それは感動だった。喜びであり、安心であり、それに収まりきらない、悲しみすら孕んだ何かである。

隣でまんじりもせず座っている藤は、ひよっとしたら泣き止まない洛澄を面倒くさく思っていて、それかあるいは困惑しながら、なんとなく気まずくて身動きができないのかもしれない、などと考えた。だけど洛澄は今、藤にそこにいてほしかったので、甘んじて思う存分、泣くことにした。

……どれぐらい泣いたか分からないが、少なくとも涙は涸れてきたと見えたところで、洛澄は立ち上がり、しゃくりあげる胸を抑えながら橋を渡った。

いくらか足下がおぼつかなく、藤が見かねて立ち上がったのが見えたが首を振り、待ってもらおう。

橘の木から、一番手近な黄色い実をもいでまた橋を渡る。

戻って座った藤の隣で、まだいくらか上下する胸を落ち着かせなければならなかった。

やっと落ち着いて、向き合う。ひどい顔をしているだろうし、とても照れくさかったが、羞恥^{もろて}に耐えて両手に持った橘の実を差し出した。

いぶかしげな藤に、洛澄は今一度息を整えて告げた。

「昔語りの中で、七人の姫はそれぞれが選んだ婿に橘の実をぶつけます。……あるいは、橘の実から娘が生まれ、王子に嫁ぐのです。ですから、藤さま。あなたがこの実をお受け取りになって、この場で食していただけたなら、それが、わたくしがあなたの妻になる誓いとなりましょう」

藤は何とも言えず奇妙な顔をしたが、それでも受け取ってくれた。

橘の実が洛澄の手を離れ、その重みが完全に藤に移った時、洛澄の心は情けないほど震えた。

おかしい感傷だと思われているのかもしれないし、女らしい稚拙なこだわりだと思われているのかもしれない。けれど洛澄にとっては大事なことだった。

昔から決めていた、数少ない夢の一つだったが、それを藤が受け入れてくれたことを今、信じられない想いで見つめている。

藤は手許の橘の実を所在なげに見つつ、ようやく皮を剥きに指をひっかけたが、ふと思いついたように洛澄を見た。

「あなにやし、えをとめを」

洛澄は首を傾げる。しかしこの文句、どこかで耳にしたことがある気がした。

「ご存知ではございませんか」

「どこかで、聞いたことのある気がいたします」

「大和の男女はこう申します。戯れに、ではございますが、昔ながらの物言いです。男がこう言えば、女はこう答えるのです。あなにやし、えをとめを」

それを聞いて、ぴんと来た。

「国産みのお話ですね。イザナギの命^{みこと}とイザナミの命が、お二人でこの国を造る時におっしゃった御言葉」

「そのようなものまで、ご存知でしたか」

むしろ呆れたような言い方をする藤だった。

藤は橘の実を掲げるようにして、もう一度言った。

「あなにやし、えをとめを」

いくらか愁巡した後、答えてみた。

「あなにやし、えをとめを」

すると藤はどこか悪戯っぽく笑った。

藤は橘の実の皮を苦勞して剥き、異様に長い時間をかけてその小さくも苦く酸っぱい実を食べ終えた。

伝統的な胡人の婚姻にまつわるあれこれを、洛澄は一切行わなかった。

父はむしろ構わないと言ったかもしれないが、母の嫁いでのからの苦勞を泡と帰してしまう気がした。洛澄はあくまで、大和で生まれた佛教徒なのだ（実のところ、花嫁の手足に描かれる魔法のような文様への憧れは無いでもなかったが）。

藤曰く、大和の婚姻の儀式などあってないようなものだと言う。それをまるきり信用したわけでもない洛澄だったが、それはそれでよいかと大して気にしなかった。

ただし、園遊会で結婚祝いの宴は催した。音頭をとったのは、言わずと知れたカームランである。

そこには、興味を示したという藤の母と姉夫婦もやって来た。藤は彼らが来たがっているのをとても嫌そうに伝えてきたが、洛澄はむしろ嬉しかった。宴では胡人の集団に圧倒されていたが、おかげで洛澄は、大和言葉を話すこともあり、親しみやすいと受け取られたようだ。藤の母は

藤とよく似た顔立ちをしていたが、息子よりもずっと表情が豊かで、暖かな笑みを向けてくれた。

。意外なほどあっさり二人の結婚を承諾した母茉莉花は、恐らくは十数年ぶりの園遊会の庭の片隅、眩しそうに宴を眺めていた。

この宴を終えたら、藤は洛澄と母の家に移り住むことになっている。

宴の間、母を気かけながらも、挨拶回りに忙しい洛澄は駆け寄って気遣うことができない。しかし楽の音が高まり、皆が皆踊り狂う時間が訪れて母のいた場所に目を遣ると、いなくなっている。

慌てて見回して歩き回ると、信じられないものを見つけて目玉が落ちるかと思った。

母が踊っている。

隣には歳若い友人がいて、恐らくは彼女が母を踊りの輪の中に引っ張り出してくれたのだろう。

。母はいくらか恥ずかしげで、けれども動きは驚くほど流麗だった。

洛澄が呆然としている間にも、母の表情はほぐれていく。

はっとするほど若々しかった。

その背後を、遠い砂漠に月のように浮かぶ緑の幻想が舞った。話にだけ聞いたことがある、蜃気楼とはこのことかと思った。

ずっと昔の、海の向こうの国で、まだ世の中に夢を持っていた瑞々しい娘が、ふらりと今のこの場所に迷い込んだようだった。

じわじわと瞳の輪郭が揺らいでくる実感があって、あわや崩れるかという時に手を引かれた。

藤だった。

「どうかいたしましたか」

訊かれて、洛澄は驚きに引っ込んでしまった涙を笑みに変えた。

「いえ。藤さまも、踊りましょう」

かなりはっきりと颯め面をされた。

「藤さまのご家族の皆様も、踊ってらっしゃいます」

「調子のよい者ばかりで、恥ずかしうございます」

「そのようなこと言わずに」

結局、藤は適当に足を動かすばかりで、周りの親父たちや娘たちに文句を言われ通しだった。

宴ではことあるごとに橘の実をいくつもぶつけられて、受け止めるのにも疲れた花婿はいささか辟易したようだった。

その実を投げるのは、子宝に恵まれるように、ということらしい。

初耳だったので、あまつさえその実を食べさせてしまった自分は、案外はしたない真似をしてしまったのかもしれない、と洛澄は（祝い酒のためではなく）赤くなった。

